様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０２１０

研究課題名（和文）古代日本における口承文学の地域的多様性と表記の関連についての研究

研究課題名（英文）A Study of Relations of Regional Varieties and Notations in Ancient Japanese Oral Litarature.

研究代表者
遠藤　耕太郎（Endo, Kotaro）

共立女子大学・文芸学部・教授

研究者番号：５０５１４１１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：古代日本文学はその始発において、漢字と出会った。漢字は意味と音を同時に表すが、その意味を利用して日本語を書き表すのが訓字、その音を利用したのが音仮名である。古事記の歌謡や、万葉集の東歌などは、そのほとんどすべてが音仮名で書かれている。
従来、こうした現象は伝統的な歌や地方の歌の音声を正確に表記するために起こったと考えられてきた。しかし、中国少数民族ペー（Bai）族の、漢字による自民族語表記のありようをモデルとすると、まず訓字表記によって、文字以前の歌とは異なる記載の歌が創造され、それを儀礼などの口頭で歌う必要のある場で歌うために、音仮名表記が用いられたものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Ancient Japanese literature adopted Chinese characters, Kanji at its beginning. Kanji represents meaning and sound at the same time. Japanese reading of expressions is based on meaning of a Kanji, Chinese Reading is based on the sound. Songs such as“KOJIKI” and “AZUMA UTA” are almost entirely written according to Chinese Reading.
It has long been thought that this approach is used to write the sounds of traditional songs and regional songs.However,using notes of the Bai peoples’ native language with Kanji as a model, we can say Japanese reading created new songs, and ancient Japanese used the Chinese reading for songs such as those used in rituals.

研究分野：日本古代文学

キーワード：口承文学　記載文学　ペー（Bai）族　歌垣　梁山伯と祝英台　東歌　祭文　殯宮挽歌

１．研究開始当初の背景

従来、日本文学の始発において、民謡などのそれまでの口承文学が、中国から齎された漢字によって表記されることで、記載文学が生まれたという文学史的把握が一般化していた。

しかし、2000 年代に入ってからの木簡研究の進展によって、中国から漢字が齎され、それを学習することによって、口承文学とは別次元の、「書く」という営みによって、記載文学は創造されたという考え方が支配的になった。ただし、その際、「口承文学」とは、地域を超えた均一的なイメージで捉えられていた。つまり、口承文学は一枚板ではなく、地域によって、さまざまな差異や多様性があることが、ないがしろにされていた。

一方で、これも 2000 年代初頭に、日本古代文学者が、中国少数民族など、無文字の民族地域に入り、歌垣や神話を始めとする口承文学が、その社会の中でいかに機能しているのかを押さえ、それをモデル化して日本古代の口承文学のあり方を想定する研究方法が広まっていった。

このような状況下で、中国雲南省に暮らす少数民族ペー（Bai）族は、一方に歌垣（歌の掛け合い）を始めとする豊富な口承文学を持ちつつ、南詔国・大理国という国家を成立させ、漢字によって自らの民族語を表記する技術を持っていることがわかってきた。

２．研究の目的

本研究は、かつて自らの国家を建設し、漢字による自民族語表記の伝統をもち、またその一方で、豊かな口承の歌掛け文化を残すペー（Bai）族の文化をモデルとして、口承文学が文字と出会ったとき、どのように変容するのかを具体的に明らかにすることを目的とした。

その際、一口に漢字で自民族語を表記するといっても、そこには地域による差異や多様性があることを明らかにし、それが口承文学、記載文学とどのように関わっているのかを現地調査を踏まえて明らかにすることに留意した。

こうして得た具体的な文字・音声資料を資料化し、それをモデルに古代日本における口承文学と記載文学の関係性を、地域的な多様性といった視点から捉え返すことを最終的な目的とした。

３．研究の方法

本研究は、中国少数民族ペー（Bai）族の、漢字を用いて自民族語を表記する表記するペー文によって書かれ、口頭で演唱する語り芸「大本曲」「本子曲」、葬儀でペー文を用いて唱えられる祭文等を調査、記録し、その第一次資料を公開する。その具体的な方法は、以下のとおりである。

（１）中国中原から流入した語り芸「梁山伯と祝英台」が、大理地方と剣川地方では、その表記の仕方が異なっていることを具体的な資料で示す。

（２）剣川地域で、音仮名中心表記が採用され、そのストーリーがあらすじ化していることの原因を、現地でのインタビュー、歌掛けの技術との関連を含めて明らかにする。

（３）大理の「大本曲」の語り手、趙丕鼎氏の祭文の資料化。

（４）モソ（Mosuo）人、ペー（Bai）族の、喪葬儀礼を調査、記録する。特に、女性による哭き歌を中心として記録する。幸いなことに、実際に、モソ（Mosuo）人の喪葬儀礼を調査することができた。

（５）以上の方法によって得られた資料をモデルとして、古代日本にける口承文学と文字表記の関係の、地域的差異・多様性を明らかにする。

４．研究成果

（１）『梁山伯と祝英台』という中国中原に起源を持つ語り芸が周縁の少数民族地域に伝来しているが、ペー（Bai）族居住地域にも二種類の語り芸として受容されている。南詔国や大理国の都であった大理ではこれを「大本曲」と称し、その辺境に位置し、現在も歌掛けの盛んな剣川では、これを「本子曲」と称している。

（２）「大本曲」は訓字主体表記で記され、その長さもかなり長く、厳格な師弟関係によって教授されていくのに対し、「本子曲」は、比較的容易に習得できる漢字の音仮名を用いて表記され、物語もかなり、あらすじ化しており、歌い手による書き換えや、自由な即興性が認められている。漢字によって自民族語を表記する方法は、それぞれの地域性に応じて多様である。

（３）「本子曲」が、簡易な音仮名中心表記で記され、あらすじ化されているのは、物語がそのまま厳格に歌われることを目的とした表記ではなく、その一部の特徴的な表現（歌語的な表現）が取り出され、歌掛けにおいて相手を誘ったり拒否したりする即興的な歌表現に開かれていくからである。中国中原の漢字で記された語り芸は、こうして一部の音仮名が読める歌い手によって歌掛けに開かれ、さらに無文字の歌掛けに連なっていくのである。

（４）『古事記』は散文部分を訓字主体で、歌謡を音仮名主体で表記する。この音仮名主体表記は、より口承性の強い、伝統的な歌謡の音声を正確に移すことを目的とした表記とされてきた。しかし、（２）（３）をモデルとすると、音仮名表記は、一歩漢文脈に近い訓字表記を、口承世界に開いていく可能性を持っている。訓字主体表記によって新たに創造された「書く」歌謡を、再び「歌う」歌謡とするところに、太安万侶の工夫があった。

（５）『万葉集』東歌の表記は音仮名主体である。従来、東歌が実際に東国で歌われていた民謡なのか否かについて議論がなされ、

一定の水準で官人を始めとする都人の手が入っていることが指摘されてきた。この問題に関しても、（２）（３）をモデルとすると、より漢語的な訓字主体表記で創られた「書く」歌を、音仮名表記で「歌う」歌に開いていく意図があったことが見えてくる。それは東国が中央に服属することを示すさまざまな儀礼や宴の中で、歌うことが必要とされたからである。

（６）モソ人やイ族の喪葬儀礼には、死者を愛慕し、その死を認めないという言語表現から、死者を恐怖するがゆえに慰撫・鎮魂し、さらに死者の世界に送り届けるという変ご表現への大きな流れが確認できる。が、儀礼空間においては、両者がただ一方向的に変化するのではなく、両者が互いに揺れ動きながら、最終的に死者の世界に送る表現に行き着くという過程をたどる。ペー（Bai）族の喪葬においては、啓殯時、「大本曲」の語り手が、ペー文によって記した祭文を読み上げる。それは中国的な誄の形式を枠組みとして、その中に、女性による哭き歌（死者を引き戻そうとする歌）、死者を死者の世界に送るというシャーマンの呪文が取り込まれている。死者の近親者の立場と、死者を送るシャーマンの立場に自由に降り立てる存在となって、語り手は祭文を作成するのだが、そこに書くことによって獲得された、新たなシャーマンの視線がある。

（７）『万葉集』柿本人麻呂の殯宮挽歌には、（６）の祭文と同じように、自由にそこに連なる人々の立場に降り立つ、語り手の視線がある。人麻呂もまた、書くことによって獲得された、新たなシャーマンの一人である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）
(1)山田　直巳、大理州雲龍県の踏葬歌（白族）の構造―長新郷永香村を例に―、アジア民族文化研究、査読有、16 号、2017、1－44
(2)遠藤　耕太郎、日並皇子殯宮挽歌の抒情の方法―東アジア辺境地域における誄の技術―、日本文学、査読有、12 月号、2017、12-22
(3)遠藤　耕太郎、「中国少数民族歌謡における〈喩〉と〈音〉」、アジア民族文化研究、査読有、17 号、2017、93―110
(4)遠藤　耕太郎、リス族の「生産／恋愛叙事」歌謡と万葉集東歌、アジア民族文化研究、査読有、17 号、2017、141―146
(5)岡部　隆志、「歌掛けをどのように論じるか―折口信夫の論理と「歌路」論、共立女子短期大学文科紀要、査読有、60 号、2017、1-13
(6)岡部　隆志、序詞における音と意味 ： ナシ族歌謡の「ゼンジュ」の実態から、共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要、査読有、23 号、2017、65-74 頁
(7)富田　美智江、中国古代の歌の禁忌、流経法学、査読無、17 巻 1 号、2017、1-22
(8)遠藤耕太郎・岡部隆志・張正軍・工藤隆・富田美智江・飯島奨・草山洋平・李莉、資料編 2（中国少数民族歌謡における,音・意味・文字）、共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要、査読有、23 号、2017、63-217
(9)遠藤　耕太郎、野中古市人歌垣之類」考、古代文学、査読有、55 号、2016、78―89
(10)遠藤　耕太郎、東アジアの喪葬歌舞と歌垣―モソ人の喪葬歌舞をモデルとして―、アジア民族文化研究、査読有、15 号、2016、103―156
(11)岡部　隆志、橋后観音会調査報告―仮面舞と神懸かり―、アジア民族文化研究、査読有、15 号、2016、51―64
(12)遠藤　耕太郎、東アジアの喪葬歌舞と歌垣― モソ人の喪葬歌舞をモデルとして―、アジア民族文化研究、査読有、15 号、2016、103-156 頁
(13)真下厚・張正軍・富田美智江・唐建福、中国湖南省鳳凰県苗族の恋人争いの歌掛け、アジア民族文化研究、査読有、15 号、2016、65-92
(14)遠藤　耕太郎、縛られる〈音〉／開かれる〈音〉―中国少数民族ペー族の「本子曲」と歌掛け―、古代文学、査読有、54 号、2015、27―34
(15)遠藤　耕太郎、モソ人の病祓い儀礼「ニャムチ」の実際と考察、アジア民族文化研究、査読有、14 号、2015、193―207
(16)遠藤　耕太郎、東アジアの歌の序詞的発想　法―中国少数民族ナシ族の「ゼンジュ」と序詞―、日本歌謡研究、査読有、第 54 号、2014、47―58
(17)山田　直巳、万葉の音―その社会史―、國學院雑誌、査読無、第 115 巻 10 号、2014、238―255

〔学会発表〕（計 9　件）
(1)遠藤　耕太郎、中国西南少数民族歌謡における〈喩〉と〈音〉、古代文学会、2017.11.4、共立女子大学（東京都）
(2)遠藤　耕太郎、“喩”與“音”―中国少数民族歌謡與日本古代歌謡、国際学術シンポジウム「首届東亜民俗文化與民間文学論壇（招待講演）（国際学会）、2017.8.21、昆明（中国）
(3)遠藤　耕太郎、殯宮挽歌の交響、日本文学協会、2016.6.26、岩手県立大学（岩手県）
(4)遠藤　耕太郎、葬送から歌垣へ―中国少数民族の事例をモデルとして―、アジア民族文化学会、2015.11.7、奈良春日野文化フォーラム甍（奈良県）
(5)遠藤　耕太郎、歌垣の変遷、古代文学会、2015.9.5、共立女子大学（東京都）
(6)岡部　隆志、憑依する白族の女性達―雲南省［ジ］;源県橋后における観音会調査報告―、アジア民族文化学会、2015.5.9、共立女子大学（東京都）

(7)遠藤　耕太郎、モソ人の病祓い儀礼について、アジア民族文化学会、2014.12.13、上智大学（東京都）
(8)岡部　隆志、慰霊の心性―喚起される情―、現代民俗学会、2014.7.13、國學院大學（東京都）
(9)遠藤　耕太郎、書物・文字が生み出す音声―中国少数民族ペー族の語り芸の表記から―、古代文学会、2014.7.5、共立女子大学（東京都）

〔図書〕（計５　件）
(1)遠藤　耕太郎他、ことばの呪力　古代語から古代文学を読む、おうふう、2018、381（162-179）
(2)岡部　隆志他、ことばの呪力　古代語から古代文学を読む、おうふう、2018、381（100-115）
(3)岡部隆志　他、歌を掛け合う人々：東アジアの歌文化、三弥井書店、252（125-202）、2017
(4)岡部隆志、中国語訳　張正軍、神話与自然宗教、上海交通大学出版社（中国）、2016、215
(5)岡部隆志・遠藤耕太郎　他、中国語訳　張正軍、対歌文化論―日本与雲南白族対歌比較研究、科学出版社（中国）、266（16－26.27-36.138-157.158-199）、2016

６．研究組織
(1)研究代表者
遠藤　耕太郎（Endo Kotaro）
共立女子大学・文芸学部・教授
研究者番号：50514113

(2)研究分担者
岡部　隆志（Okabe Takashi）
共立女子短期大学・文科・教授
研究者番号：　50279733

山田　直巳（Yamada Naomi）
成城大学・社会イノベーション学部・教授
研究者番号：　20141301

富田　美智江（Tomita Michie）
流通経済大学・法学部・助教
研究者番号：　40615952

(3)連携研究者

(4)研究協力者
張　正軍（zhang zhengjun）
華東師範大学・外国語学部・教授
張　錫禄（Zhang xilu）
大理大学・民族文化研究院・元教授
李　徳静（Li Dejing）
雲南省社会科学院・麗江東巴文化研究所・所長
工藤　隆（Kudo Takashi）
大東文化大学・名誉教授
飯島　奨（Iijima Susumu）
共立女子大学・文芸学部・非常勤講師
草山　洋平（Kusayama Yohei）
流通経済大学・学習支援センター・所員